

調した本書の内容に沿ったものです。序文に「日本に来た外国人が、自分達の国との違いについて感じたことを採り上げる」と述べて、目次にその項目をあげています。日本人が刺身を食べているのに対し、欧米人はそれを見て驚くなどのようなカルチャーショックについて書かれていますので、異文化の違いの面白さを楽しめます。欧米であれば、レディーズ・ファーストが一般的ですが、昔の日本では女性が一步下がって男性についていきます。しかし現代では、欧米化している女性が多いように思えます。欧米人が昔の日本を見て驚いたように、もし昔の日本人が現代の日本を見たら驚くでしょう。図書館報に原稿を執筆する中で、「さかさま」という世界観をいかにわかりやすく伝えるかについて考えました。欧米から見た日本が「さかさま」のように、現代でも見方を変えれば身近なところにも「さかさま」は転がっているかもしれません。同じ日本でさえも異文化は存在します。異文化だからといって拒絶するのではなく、お互いを認め合いながら共存することが大切だと思いました。今まで知らなかったものと出会い、実際に目で見て感動し、その感動を周りに広げていけたらと思いますし、これからは縮緬本のような日本の良い文化や風習を残していきたいです。



中道 彩さん
(英米語学科4年次生)

「アンネ・フランクの日記から学んだこと」

オープン・キャンパスで私は、高校生の皆さんに図書館の中を案内して、「高校生が知っている世界の有名な書物展」で高校の授業で習う世界の有名な本を見てもらいました。「絵踏の図」が載っているシーボルトの『日本』を見て、「これ、見たことある!」と声をあげる高校生が多かったです。その中で私は、アンネ・フランクの『隠れ家』という貴重書にとっても興味を持ちました。この作品は、皆さんが『アンネの日記』というタイトルで親しんでいるものです。著者のアンネ・フランクは、第二次世界大戦中ユダヤ系ドイツ人でナチス党がユダヤ系の人々を迫害しはじめたので、オランダに逃れましたが、オランダもナチス党に占領されてしまい、アンネとその家族は、2年間隠れ家生活を余儀なくされました。しかしながらアンネは、終戦直前に見つかってしまい、収容所に送られ、病死しました。隠れ家での生活を書き留めた日記を終戦後、アンネの父親が少し手を加えて出版したのがこの『隠れ家』です。1947年にオランダで出版されました。外大の図書館が所蔵しているのは、その初版本です。アンネは隠れ家での日常生活を架空の親友キティーに宛てた手紙という設定でほとんど毎日書き綴っていました。

次にアンネの「女性」という存在への考えについてお話しします。アンネは読書が好きで、隠れ家生活の中でたくさんの本を読んできましたが、その中で自立する女性の本を読み、女性の立場向上について考えを深めていました。アンネが生きた時代では、色々な国で女性が男性と対等な権利を手に入れ始めていましたが、まだまだそれは不十分で、出産という痛ましく、苦しいことをする者であるからもっと尊敬されるべきだと考えていました。また、彼女は迫る恐怖に希望を失いそうになりながらも、それでも平穏な世界が戻ってくることを信じてやみませんでした。アンネがある日聴いたラジオでとある政治家が、終戦後ドイツ占領下で苦しんだ人々の手紙や手記を集めて公開するという話が流れました。アンネは自分も本を出したいと思い、この日記をその資料に使うことを考えていました。その遺志を継ぎ、終戦後彼女の父親がアンネの日記を出版しました。今も戦争は、世界のあらゆるところで起こっています。私たちもいつ戦争に巻き込まれるかわかりません。しかしどんな時でも自分の理想の暮らしへの想いと平和への希望を捨ててはいけないということ、アンネの悲痛な想いを綴ったこの作品を読んで改めてそう思いました。私は、これから社会に出てもっとたくさんの困難に出会うと思います。15歳の女の子がこんなにも強い心を持っていたのですから、何事にもへこたれず、ハードルが高くても決して諦めない強さを持つようと思いました。